



大本山永平寺



静と動の二月

ここ永平寺では、今月一日から七日までの間、報恩の撰心が行われます。

これは十二月にある臘ろうはつせつ八撰心と共に諸役寮、修行僧の関係なく朝、起床してから就寝するまで、まさに坐禅三昧の時を過ごします。この時節は、言うまでもなく年間を通して一番気温が低い時であり当然降雪も多く、一日中氷点下から気温が上がらないことも珍しくありません。こうした時、ここ永平寺の禅堂の中では、多くの坐する者がいるにも関わらず、無人のごとくの静寂さに包まれます。それは、言い換えれば静謐とも言えるような空間であり、時として外に深々と降り続く雪の音さえ聞こえてくるような感さえ漂わせます。

この撰心が終わると、一旦修行に区切りを付けて下山する者と、入れ違いに新しく入山を望む者が上山して参ります。早朝、雪による木々のしずりの音しか聞こえない山門前に立ち、静寂を打ち破って伽藍が震えるほどの声で入山を乞うのです。その声を聞くと、各々の心に自分が修行を志した時を思い起こし、初心に帰りまた修行に精進する気持ちとなるのです。まだ春の気配さえどこにも感じられない時節ではありますが、その声はまさに春の到来を予感させる、それが二月の永平寺なのです。



大本山總持寺



春の訪ずれ

先月五日の「寒の入り」より毎日横浜鶴見の街頭を応量器を持ち鈴を鳴らして周っていた「寒行托鉢」が今月二日で終了し、翌三日には春を告げる「節分会追儺式」が盛大に行われます。

大祖堂には袴姿の有名な年男・年女、千人を超える参詣者が集まり、はじめに江川禅師さまご親修の御祈祷法要が行われて東日本大震災被災地の復興や人びとの安寧・無病息災・心願成就が念じられます。厳粛な法要が終わると、禅師さまが「福は内」と発声されるのを合図に一齐に豆が撒かれ、堂内はたちまち賑やかな雰囲気になります。何回かに分けて豆撒きする毎に熱気を運び、最後に福引き抽選会が行われて人びとは福をいただいて家路につかれます。

お釈迦さまのご命日である十五日には「釈尊涅槃会法要」が仏殿で行われ、色とりどりの涅槃団子がお供えされます。これに因み十二日より「涅槃撰心会」も修行されます。

また、修行僧の集中修行期間である「冬安居制中」が解制（終了）となっており、總持寺での修行に節目をつけた僧がそれぞれの出身地に帰る時季。ほほ時を同じくして今月下旬からは、新しい修行僧が続々と上山してきます。世間より早めの「別れと出会い」があるのが總持寺の二月であります。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

敬老日軍歌に勝る芸もなく

三重県 山下 利夫

評 敬老の日のお祝いの集い。座も和み何か一芸をと言われ
ても実直に生涯を送ってきた身。戦争を体験した若きころの
軍歌しか歌えないのだ。おもはゆさと戸惑い。
作者も歩んだ人生も、かい間見える。

鮭あはれ古里に来て打たれけり

岩手県 上沖 貞子

評 鮭は北洋に回遊し数年後には古里の川へ産卵のため戻っ
て来る。大航海を終え生まれた川を遡上する鮭が捕られたり
する。大自然の摂理は壮絶に、又一尾一尾に深い哀れさを作
者は感ぜずに居られないのだ。

◆ 夫婦して同じやまひや置炬燵

愛知県 中根 昂生

◆ 塩鮭の干さる飯設の店舗前

岩手県 阿部 熙子

◆ 空跨ぐ漢一人や松手入

岩手県 鈴木 道昭

◆ おはじきの風邪癒えし子と皺の手と

秋田県 後藤 栄子

◆ 雪の日は雪の日なりに過ごしけり

北海道 池田 雨郷

◆ 初恋の人の名のある菊花展

東京都 野村 信廣

◆ 懺悔するところに響く虎落笛

福岡県 安部 正和

◆ 小春日や椅子ごと母を縁側に

山形県 清野佐知子

◆ 来客もメールも無くて霜夜かな

新潟県 大橋 恒次

◆ コスモスは優し私もそのやうに

静岡県 青山 清子

* 選者吟

円墳の白梅ばかり潔し

五灰子

* 作句小見

ご高齢の方がたの投句もたくさん頂いております。深い人
生を経てられたことが一句一句に投影されていて、味わい
深い句に圧倒されることがよくあります。嬉しい選をさせて
頂いております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

コスモスの咲く野の道を子ら連れて線量計
を保母は提げゆく
福島県 大槻 弘

評 放射線の線量を測定する線量計、日常に縁のなかったそんな計測器を、持ち歩かねばならない被災地の暮らしの一端を捉えた歌。のどかな田園風景から一転して被曝の危険に脅かされる人びとのぎりぎりの暮しが保育士と子らを通してうかがえる。

川端のいちじく摘むも終りとすあと小鳥
におまかせ申す
山形県 多田 さよ

評 結句の「おまかせ申す」は、作者が小鳥のためにいちじくの実を残してやったやさしさの表現であろう。その余裕のある措辞もまた、一首の味わいどころである。

- ◆人住みてこそ家と思えりわが地区に今宵明りのひとつ戻りぬ
鳥根県 詠人知らず
- ◆本葛の八十吉きょうは店舗とづ吉野山にて草の夕かけ
三重県 野呂 と志
- ◆ブランコの足場くぼみの水鏡児の心うつす澄みし朝空
福井県 三浦 豊子

◆作業衣に引っ付き虫が数多つく小さな命それぞれ持ちて

◆変身の叶ふとすればこの夜のこの満月の光をあびて
兵庫県 河本佐知代
福岡県 三吉 誠

◆ようやくに今日は晴れたり花終へしダリヤの球根急ぎ掘りあぐ
北海道 佐賀 ユリ

◆何気なき会話なれども癒されぬ友の言葉のやさしき語尾に
東京都 津久井すみ子

◆落葉掃く幼き孫に近寄りて道行く人ら声かけくる
北海道 吉田 洋子

◆「生きてゐる」ああそれだけで幸せと手術を終へてしみじみ思ふ
北海道 池田 雨郷

◆本を詰め朝一番の図書館とマックを行き来し一日が暮れて
愛知県 原 智康

*選者詠

会話の網何とか手繰りいたりしも今年の春
まで 老母病み臥す
ちづ

*作歌小見

「人が住んでこそ家」と過疎地の人びとの思いを代弁する、心に沁みる三首目の作品に、作者名がなく「詠人知らず」としました。健康なときには知り得なかった生の喜びが漲る池田作品、手術が成功してよかったですね。

※本誌一月号「曹洞歌壇」*作歌小見「秋の実りの」は「秋は実りの」の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。(出版部)